日出彦の歳時私記

1、きつねの町

昨年末、豊橋近郊の会社を訪問する機会があり、もののついでに豊川稲荷に詣でようと発念した。ＪＲ飯田線で約 10 分、豊川駅に到着する。ここは豊川稲荷あっての町であり駅である。駅を降りて右に行っても、左に行っても神社に到達する町の造りになっている。昔からの参拝道は左側になるので、そちらに足を進める。西本町通を突き当たりで左に折れると、門前通がまっつぐ続いていて総門に至る。暮も押し迫っていたためか、観光客も参拝客もめっきり少ない。道なりに行くと昔懐かしい店構えが続く。張りぼてのきつねが店先に並べられているあたりに、観光案内所の看板を見つけたが、閉まったままだ。朝の 10 時台のためか、ところどころ開いていない店もある。それとも閑古鳥が鳴いているかな？

はやりの「三丁目の夕日」的な昭和のレトロな町並みを再現しているようにも見えるが、いつ頃から始めたのか、町興しなのか、分からない。一寸中途半端だ。前方に総門が見えてきた。境内に入ると、山門もあるのだが、寺なのに向かって左手に大鳥居が立っている。これは稲荷のためか？

鳥居の先に本殿がみえる。本殿へは緩やかなスロープが続き、登り詰めたところにある。稲荷らしく、本殿へ登る坂下に狛犬のようにきつねが守護している。

境内の立て看板によると、豊川稲荷というのは通称で、1441 年に東海義易禅師という方が開創した豊川閣妙厳寺という曹洞宗の名刹ということであるから、鶴見の総持寺にも縁のあるお寺のようだ。本尊とは別に、境内に「豊川吒枳尼真天」という白狐に跨る善神を寺の鎮守として祭ったのが有名になってしまったことのようである。本殿にはこの神様が祀ってあるらしい。だから鳥居か？　商売繁盛のご利益があるそうなので商人の信心を得たものだろう。ここで観光バスが着いたか、ガイドを先頭に参拝客であふれ始める。なお、寺としては先ほどの総門の先にある山門の先に法堂（はっとう）があり、本尊には千手観音菩薩像が安置されており、拝観できる。こちらは大変静かである。

本殿を下り、法堂の裏手に回ると庭園になっている。江戸初期の造りというが、鯉と亀がのんびりと泳いでいる。ここで、幼児連れの家族に出会った。この池を過ぎるといよいよきつねの邑に足を踏み入れる。遠くに人の声がする。

庭園を基点として、裏山に続く参観道はループになっていて、不規則な脇道が縦横に出ている。一寸した迷路だ。逢魔が時では同じ道を何度も通りそうだ、と思いつつ、いつしか一回りして同じ場所に出て来てしまった！道の両側に赤い前垂れを着けたお使い狐を散見する。本尊でもなく、本来の神様の方でもなく、眷属のきつねが

有名なのは、寺としてどんな気持ちだろう。裏手の山側に法霊殿（阿弥陀仏などを祀る）や大黒天堂（入口の石造を撫でると福が授かるというので撫でてみる）など、仏様のデパートになっている。

本殿のガードマンであるお使いきつね

←本殿

裏庭の奥、先ほどの総門から見れば左手奥、に霊狐塚というのがある。そこは一番奥まったところでほとんどの人は素通りしていく。白い幟が林立して誘っているので乗ってみる。

←日本庭園の池

最初のきつねは端正な冷たい顔で出迎えた。巻物を咥えているのは化けるところかな。

行きついた先はきつねの村であった。入口で色っぽい母子きつねが出迎えてくれる。桃を抱えたり、巻物を咥

えたりしているきつねがいる。威嚇しているのか、警戒しているのか、われわれに向かって咆えてくるきつねもいる。　ここではのどかなきつねだけの世界が作られているようだ。人の喧噪は幟の壁で跳ね返されてしまうに違いない。

村は大きなきつねに守られて、小さなきつねが群がっている。その数、数百匹。境界の塀すれすれまでいろいろな表情のきつねが思い思いにこちらを見つめている。きつねの表情は人擦れがしていない。人懐っこいような、そうでないような、自律した表情だ。子きつねもかなりいる。700 年の歴史のある寺だから、きつね村も長い歴史を持っているのだろう。人間の欲望がこの一体一体のきつね像に込められてきたのだろう。でも、きつねはきつねだ。自由を謳歌していればよい。

紅葉もちょうど美しい。

ここは有名な大岡越前の領内だったようで、境内の寺宝館に納められたゆかりの品々が残されている。東京赤坂にある豊川稲荷を江戸の出張所として勧進したのも越前守だったようだ。

豊川稲荷は２時間もあれば一巡りできる。五百羅漢のように献納された白狐の像はいろいろな表情を持っている。門前では稲荷寿司やら稲荷だんごやらが土産に並び、まさにおきつね様々であった。

2、天犬狛犬　―金毘羅編

神社を守る守護神は通常「犬」であり、天犬、狛犬と呼ばれます。

天犬：　尼犬とも。狛犬の牝。天狗（てんぐ）の別称の意もあり。「阿」の形をしている。

狛犬：　高麗犬とも。印度起源の神獣で、獅子が日本化されて犬になったともいう。獅子はライオン似の神獣。狛犬の総称または牡。「吽」の形をしている。角がある。

豊川稲荷の白狐のように天犬狛犬の代わりをする獣を含めて「神使」というそうです。

各地の神社を廻ると多くの天狗狛犬に遭遇しますので、これから順次紹介して参りましょう。

今回は一昨年に金毘羅さんをお参りしたときのものです。まずは町並みと本殿と巫女さんの写真から。

←黄色いのはお守り

最初は下界の方からだったと思いますが、さだかではありません。対ですから似たもの同士ですが、角のない狛犬もいますね。阿吽は向かって右が阿、左が吽だそうですが、そっぽを向いてしまっているのもおります。夫婦説もあるので、仲が悪いのかな？

3、ピクチャーマンホール

ピクチャー・マンホールについては前にも書きましたが、Web で検索するとマニアが集めて公開しており、100 件以上も出てきます。また本誌でもうさお氏が事例を挙げて紹介しています。一般には「デザイン・マンホール」と呼ばれるらしいのですが、小生は採りません。波型とか放射状とかの幾何学図形は対象から外したいためです。町々で見かけるマンホールの蓋のデザインが絵画的なものを「ピクチャー・マンホール」と呼ぶことにしたいと思います。2．の天犬狛犬と同様に、嵩張らない旅の思い出になるので、自分の足で集めたモノがよしとします。中でも、彩色されたピクチャー・マンホール（の蓋）は上物です。

↑これだって
デザイン・マンホール

↑典型的なデザイン・
マンホール

↑モザイクで苦労
してますね

↑真ん中の銀杏マーク
が悩ましい（半ピクチャー）

ここでは上例のようなものはピクチャー・マンホールとは呼ばないことにします。
これから暫くピクチャー・マンホールを紹介して参ります。

【神奈川県】

最初は地元の神奈川県のものです。これは消火栓ですが、いろいろな用途に使われています。消火栓は黄色に塗られることが多いので、パターンが識別しやすいので載せました。

これはうさお氏の記事にもありましたが、県の鳥であるかもめ、県の木であるいちょう、県の花であるやまゆりをデザインしています。上側の蜂の巣みたいなつぶつぶ模様は何でしょうか？　下側の波は海の象徴のようですが。

ほかに、何か読み取れたら教えてください。

【海老名市】

またまたローカルな例です。小生の住んでいる神奈川県海老名市の使っているものです。真ん中に市章、左に市の花であるさつきと市の木であるつげ、右に昔国分寺があった頃にあったとされる七重の塔、波は相模川の川面を表すようです。市役所には何と説明用パンフレットも用意されています。それには彩色された図案が載せられています。

これはピクチャー・マンホールとはいえず、よく分からないのですが、防火用水槽と書いてあります。
真ん中の「60」というのは水の容量でしょうか？

見かけたのは海老名市のスーパーマーケットの裏庭ですが、横浜でも見たことがあります。

デザインの意味の分かる人は教えてください。

　これは海老名市消防本部の防火用水槽です。これにも小さく「60」と書かれています。
　絵は消防士がまさに放水しているところを描いています。消防士の足元に水溜りができているところもリアルに描かれています。

【東京都内】

　東京都内、京都市、鎌倉市など昔都のあったところはなぜかピクチャー・マンホールがありません。東京都で唯一あるのは消火栓のマンホールです。子供の消防士が二人で重いホースを持って、放水しているところです。右上に都水道局のマークがあります。背景がビルである点が東京らしいです。これは四角のマンホールですが、丸もあります。

大分紙数が増えてしまいました。ピクチャー・マンホールは始まったばかり。お見せしたいのがまだまだあるのですが、今回はここまでとしましょう。前にうさお氏が上手に撮った横浜市のものなど、この前横浜の高島屋と駅ビルの間に沢山並んでいるのを見つけました。でも、人通りが多くて、とてもうさお氏みたいに撮れそうもない状況でした。
　Dokugaku の皆さんも是非見つけたら投稿してくださいね。